

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20820051  
 研究課題名（和文） 30年代フランスの「ユニヴェルセルなシステム」理論の受容と現代における有効性  
 研究課題名（英文） The reception of the theory of a universal system in France in the 1930s and its effectiveness in present society  
 研究代表者  
 細貝 健司（HOSOGAI KENJI）  
 立命館大学・経済学部・准教授  
 研究者番号：00513144

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、20世紀フランスの思想家に総じて見られる世界認識概念である「ユニヴェルセルなシステム」概念を検討して、その概念の歴史的成立過程と、その概念の可能性への新たな展望を切り開くことにむかった。その際に、単に「システム理論」を操作概念として転用するのではなく、システムとその外部との関係を理解するうえでのこの概念の可能性と限界を認識し明示することに留意した。研究の対象として設定した分野、地域、年代は、思想史（ジョルジュ・バタイユを中心とする）フランス、1930年代である。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to examine the concept of a "universal system," the way of conceiving the world proposed by a good deal of contemporary French theorists, and to take a new view of the understanding of the historical process of the concept and the possibilities of its application in contemporary society. This research takes as its era the 1930s, as its area France and Western Europe, and as its field the history of ideas (especially the theories of Geroges Bataille). In the course of examination, this research advanced the study of "the philosophy of Zen," which attempts to establish its own particular vision of the world in an absolutely different way from that of the philosophy of Europe, and focused especially on the philosophy of Daisetz Suzuki, to whom Bataille referred often in his works. Drawing a comparison between the "universal system" and the "Ko-an" (the Zen processes of recognition of the world which surpasses the limits of the traditional western way of thinking based on the rationalism), we were able to take a new perspective on the classical question of knowing if language offers a special means of recognizing the world.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,430,000	729,000	3,159,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：(1)ジョルジュ・バタイユ (2)マルセル・モース (3)1930年代フランス思想  
(4)社会システム論 (5)秘密結社 (6)思想集団 (7)共同体

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の研究は、フランス思想の歴史が形成される中で、「全体性」という概念が、どのような役割を担い、また、その思想史の流れが、バタイユの思想形成にかなる影響を与えたかという問題をめぐって展開されていた。

(2) このようなバタイユを中心とした「全体」と「個」についての基礎的なあるいは哲学的な研究が、バタイユの個別研究の枠を超え、現代においても、universal なシステムと個の問題として存続している点に研究代表者は着目した。そこで、バタイユ理論のあり得た展開を、現代のいまここにおいて仮構してみることが、本研究の主眼となった。

(3) このような試みは、バタイユの専門家ではない他ジャンルの専門家が、自らの社会理論や経済理論を展開する中で、その補助線として、バタイユの理論を部分的に援用するというような形でのみ行われてきていた。しかし、バタイユを読み込んだ専門家が、バタイユ理論の正確な把握にとどまらず、それを現代社会理論にまで発展させた例は極めて限られた。

(4) そのような状況下で、研究代表者は、上述した方向でバタイユを捉えている稀な専門家である、Jean-Michel Besnier 氏（パリ第4大学）Jean-Michel Rey 氏（パリ第8大学）にパリで直接師事した経験を活かし、「個」を「universal なシステム」へと参入させる基盤をバタイユ理論に求め、その観点から社会思想史を記述し直すことを試みようとして計画した。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、ジョルジュ・バタイユさらにはそれを取り巻く知識人が1930年代

に展開した、「universal なシステム」を巡る社会理論の受容と変遷、さらに現代におけるその理論の有効性を探ることを目的とする。

(2) 本研究は、ひとりバタイユのみならず、30年代以降の現代思想の全体を全く新しい観点からとらえ直すことをも目的とする。バタイユの理論を仲立ちとして、現代に獲得した所与から過去の理論を捉え直すことで、過去の理論を、時代のパラダイムやそれに依存した言葉使いから解放、相対化し、その真の価値を量定することを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) バタイユの universal/particulier に関する理論を涵養した1930年代という時代の社会学理論自体のパラダイムを通史的にとらえ直す。この結節点を、哲学的・社会的な所与と、生物学・物理学的な所与とが融合した「社会学研究会」という研究サークルの内に求める。この研究サークルに提出された論文のそれぞれを丁寧に読み解き、それらが依拠する理論を辿り、跡づけ、時代のパラダイムを同定する。

(2) 「社会学研究会」が起こした知のビッグバンが、その後のフランスでいかに展開されたかを跡づける。「社会学研究会」は長いことその活動が明らかにされていなかった。その後、同様のいわゆる文理融合の知的サークル活動が、パリでも散発的に行われてきているらしい。フランスに赴き、それらの談話を拾い集めることで、「社会学研究会」の直接の継承の様態を明らかにする。

(3) バタイユの理論、そしてそれを包摂する社会理論が、時代の術語を離れて、現代の社会理論のタームへと翻訳可能であるかを検証する。歴史的パラダイムの安易な読み替えには十分注意し、飽くまでかつての理

論のあり得る展開として現代の理論へと結べるか否かを考える。

(4) その際、全体と個、あるいは社会と個人という二極を媒介するものを「悲劇」と定義することにする。ただしこの定義は余にも広い射程を含んでいるので、今回の研究の枠内に於いては、それを「語られたものとしての悲劇」とし、「言語」に力点を置いたものとして定義する。そして、正しくそのような「言語」を介して世界と個の接合の可能性を探ることこそが、この1930年代フランスあるいはヨーロッパという、時代の社会認識システムの根底にあることを明らかにし、そのようなアプローチの可能性と限界を探っていく。

#### 4. 研究成果

(1) 1930年代のフランスの知的奔流の書かれざる歴史を辿る試みを行った。渡仏し、パリ第8大学名誉教授 Jean-Michel Rey 氏に複数回のインタビューを試み、60年代フランスの知的風景についての生の情報を得た。「テル・ケル」などの歴史的な雑誌刊行の裏側で「あまりに人間的な」思惑が錯綜する様子などは、歴史の目撃者のみにしか分からぬものであり、また、その生の証言は「書かれた」歴史と驚くほど異なるものであった。さらに、当時の知的風景と30年代の知的風景との結節点についても、興味深い証言を得ることができた。

(2) パリ第8大学名誉教授 Jean-Michel Rey 氏に行った長時間のインタビューを翻訳し、注を付ける作業を行った。本作業は継続中であり、インタビュー本体よりも長い注をつけ、注を辿るだけで30年代から60年代へ至るまでのフランスの知的共同体の運動、殊に「言語」という問題意識を共有することで展開されていた運動の全体像を概観できるような体裁にしたいと考えている。現在慶應義塾大学出版会編集部とコンタクトを取り、この仕事の刊行に向けて共同作業を試みている。

(3) 「ユニヴェルセルなシステム」理論の思想的基盤を検証した。この問題は、畢竟、システムが外部を取り込みうるかという問題へと達着する。この問題意識について、

1930年代の思想の根拠の中心にあった「言語」システムを取り上げた。この「言語」システムについて、複数の知識人の思考を跡づけ、彼らの理論の枠内で、「言語」システムがモノの地平にどこまで迫れるかについての論考を行った。その成果については、先ず日本語で『立命館経済学』に、次いで、その続編ともいべきものをフランス語で『立命館言語文化研究』に発表された。

(4) フランス30年代と同時代に於いて、世界認識の問題を全く異なるアプローチで捉えようとした日本の禅思想にも着目した。具体的には、ジョルジュ・バタイユが参照している鈴木大拙に注目した。「ユニヴェルセルなシステム」を、西欧の近代合理主義を打破する世界認識システムである禅の「公案」と比較することで、言語を世界認識の中心的手段としうるか否かを問う当研究の基本的な構成を得ることができた。具体的には、システムと外部という問題について、当時のフランス知識人達が参照した日本の「禅」思想を取り上げ、「悟り」というシステムについて再考し、彼らの解釈が「悟り」システムの本質をどれほど正確に反映しているかについての論考を試みた。本論考は、まず、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学での学際学会での口頭発表の場で、バタイユの世界認識概念のテーマを明示することに具体化された。さらに、ルーヴァン・カトリック大学から出される『日本におけるフランス研究』の論集に収録される。本発表ならびにその論考は大変な好評を博し、2011年に新たに企画されるルーヴァン大学とブリュッセル自由大学との合同コロクへのゲストスピーカーとしての参加を求められている。

(5) 今後の研究課題としては、バタイユおよびその他の現代思想家たちの世界認識論に深く立ち入って、本研究で切り開いた視点をよりいっそう充実させること、および年代的には21世紀の今日まで視野を拡大することが挙げられるだろう。それと平行して、フランスで今日まで続く研究サークルの流れを把握することも今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

細貝健司、「文学と『現実』: バタイユ、バルト、イェルムスレウ、あるいは言語の限界としての『死』」、立命館経済学、査読無、第57巻、第3号、2008年、pp. 44-60

Kenji Hosogai、「Le langage peut-il passer au ras des choses ? : Saussure, Derrida, Hjelmslev face à la limite du langage」、立命館言語文化研究、査読有、第21巻4号、2010年、pp. 197-208

〔学会発表〕(計1件)

Kenji Hosogai、「La valeur de la passivité dans les tentatives de « l'expérience intérieure » de Georges Bataille entre la philosophie mystique et la discipline du Zen」、シンポジウム「日本におけるフランス研究」、2009年5月5日、ルーヴァン大学(ベルギー)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

細貝 健司 (HOSOGAI KENJI)

立命館大学・経済学部・准教授

研究者番号: 00513144